

第8章 悪臭への対応

230 ここでは畜産農場から発生する悪臭とその低減への取り組み方について記述する。

231 悪臭を完全になくすことは困難である。しかし、畜舎管理や家畜飼養の基本技術を励行することでかなり減らせる。また、地域共存のためには低減の努力は欠かせず、農業者の義務でもある。

232 畜産における主要な悪臭成分は低級脂肪酸、アンモニア、硫黄化合物（硫化水素、メチルメルカプタン、硫化メチル）、トリメチルアミンなどの揮発性成分であり、それ自身あるいは粉塵とともに拡散する。

233 悪臭の発生源として畜舎、ふん尿処理・貯留施設、パドック、サイレージがあり、またスラリーや堆肥の散布時にも発生する。

234 悪臭の発生は「悪臭防止法」で規制される。2003年の北海道における畜産に関する苦情発生件数は68件であり、そのうち悪臭については31件で全体の46%を占める。

（悪臭低減への取り組み）

235 悪臭低減への取り組みには、におい自体の低減を図ることに加えて、周辺への配慮が必要である。

（悪臭の低減）

236 悪臭は畜舎から発生する。畜舎をこまめに清掃することで悪臭を発生するふん尿や汚れを取り除く。また、悪臭は湿った状態で発生しやすいので換気を励行して、乾燥状態を保つ必要がある。敷料は悪臭成分を吸着するので積極的に利用する。

237 悪臭はふん尿の処理・貯留施設から発生する。堆肥の切り返し時に悪臭が発生するため、ひどい場合は敷料や水分調整資材を豊富に用いて堆肥化をはやめると、切り返し回数が少なくてすむ。

238 腐熟が進んで水分が低下した堆肥は、敷料や堆肥化の際の水分調整材として利用できる。腐熟した堆肥は悪臭の吸収や発酵促進に有効である。

239 スラリー曝気時にはアンモニアが揮散する。スラリーストアに覆いをかけることで軽減できる。パドックでは除ふんをこまめに行う。

240 堆肥やスラリー散布後はすみやかに土壌と混和する（維持管理段階の草地を除く）。スラリー散布の際に、バンドスプレッダやスラリーインジェクタを用いるとアンモニア揮散が抑えられ、悪臭は著しく減る。バンドスプレッダはスラリーを地表面にすじ状に流下させ、スラリーインジェクタはスラリーを土壌注入する機械である。

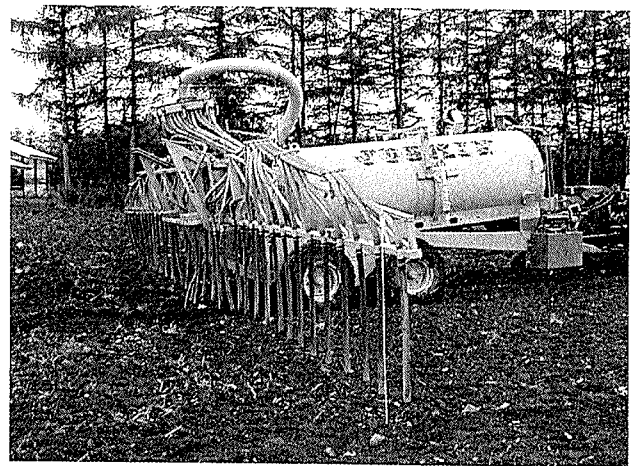


写真 8-1 バンドスプレッダ

241 サイレージ調製の際に予乾することで不良発酵は抑制されて悪臭や排汁量は減る。不良サイレージはすみやかに堆肥化を図る。さらに、残飼の清掃をこまめに行うことも必要である。

242 畜舎の清掃、換気励行、敷料の積極利用は家畜のストレス緩和に、パドックのこまめな除ふんはふん尿流出による水質汚染の低減に、サイレージ調製時の予乾は貯蔵過程における養分損失の低減など、悪臭発生の低減だけで

なく多くのメリットにつながるものである。

(近隣住民への配慮)

- 243 悪臭は受け手の理解や印象によっても大きく変わる。悪臭が発生する散布等の作業については事前に周辺住民に連絡するような地域的な取り決めをつくるようにする。また、住宅地の風向きに注意し、風上散布を避ける、休日散布は行わないなどの配慮も検討する。
- 244 畜舎や貯留施設を清潔に保ち、周りに生け垣をめぐらすなどして悪臭の拡散を抑えるとともに、美観を保つことで清潔な印象を与えることにつとめる。